

〈実践報告〉

教職課程のための「楽式論」指導の実践報告

志賀 眞知子 河合 摂子

はじめに

本学の音楽学科・演奏学科では2年次配当で「楽式論」を通年の4単位の講義として開講し、複数のクラスで授業を行っている。中学校・高等学校の学習指導要領に記されているように、表現・鑑賞において「曲想と音楽の構造や全体の響き、各声部の進行を理解し、音楽表現の共通性や固有性を背景と共に知る」「音素材の特徴、及び音の重なり方や反復、変化、対照などの構造上の特徴、課題や条件に沿った音の選択や組合せなどの技能を身につける」という事項を教えることができるように、適した楽曲を使用して学習させている。

「楽式」とは音楽の形式であり、ある形式の応用形や変形もまた形式ではないか。「楽式」を学ぶことで細部を調べ全体を把握し形式を考えることにより、曲を自分自身でよく理解しておく習慣を身につけることが出来れば、中学校や高等学校での授業で、曲の形式を考えさせ結論付けるように指導し、頭の中ではっきりした形式感を持たせ、演奏させる時には強弱やニュアンス付け、全体の纏め方もより良く指導が出来るようになる。まず、形式の最も小さい基本的な構成から理解し、その集合である唱歌形式（リート形式）の考え方を理解し、実際に今まで知りえた唱歌や今後教育現場で教える楽曲を使用して学習を始める。

1. 唱歌形式（歌謡形式、リート形式）

旋律の動機の指摘、類似と対比、構成要素の把握を経て、小楽節・大楽節を説明し理解させ、一部形式・二部形式・三部形式の曲例をあげ、それぞれの形式を学習する曲として、民謡・歌曲・オペラの中の単純な歌曲や平易なピアノ曲を使って理解させる。三部形式の拡大された形の複合三部形式と共通性のあるロンドを楽譜と鑑賞とで、構造と規模を知り味わう。この2つの形式は混同されやすいが、中間部をはさんでどのように構成されているかa.b.c…を使用し細かく見て考えさせる。中心となる定型ばかりでなく、天才の発露でもある例外部分も学習させる。

下記は各形式の学習曲である。

一部形式学習曲… 唱歌《春が来た》、フィンランド民謡《野いちご》

二部形式学習曲… フォスター 《主人は冷たい土の中に》、ブラームス 《子もり歌》
スペイン民謡 《ちょうちょう》、モーツァルト 《ソナチネ 1 番》
第 2 楽章

三部形式学習曲… アイルランド民謡 《庭の千草》、ヘンデル 《勝利をたたえる歌》

複合三部形式学習曲… ベートーヴェン 《ト調のメヌエット》

ショパン 《子犬のワルツ》、メンデルスゾーン 《結婚行進曲》

ロンド形式学習曲… モーツァルト 《ピアノソナタ K.545》 第 3 楽章

複合三部形式とは、形づくっている大きな 3 つの部分がそれぞれ 2 つか 3 つの部分に分かれており、三部形式より複雑化、大型化した形式である。

ロンド形式とは、同じ主題が間に異主題部分をはさみながら何度もくり返し出てくる曲《ロンド》の形式で、その起源や踊りにもふれ、アルファベットを用いて ABACA、ABACABA の構成をベースに少しずつ変形あるものも理解させる。C 部分である「トリオ」について《メヌエット》にも出てくることや、元の形について説明する。

2. ソナタ形式

「ソナタ」の語源から説明し、「ソナタ」と名付けられていてもまだ第二主題の確定的な出現のない二部形式や三部形式のバロック期の独奏楽器のためのソナタや協奏曲、前古典派のエマヌエル・バッハ、初期のハイドンのピアノソナタも学習した後、古典派で確立されたソナタ形式を理解させる。主題の構造とその動機の使われ方を第 1 動機を α 、第 2 動機を β を使って見て行きながら調と主題提示部、主題展開部、主題再現部の指摘をし、各部の名前および分析に使われる言葉（主題確保、推移、接続部、ブリッジ、拡大、縮小、コーダ等）を覚えて他のソナタ類の理解に活用できるようにする。また、大作曲家ベートーヴェンのソナタを多く学習することで、どのように工夫を凝らし素材を扱ったか、リズム、和声、調、作曲期による構成の変化も理解させる。

古典派の「ソナタ」は大部分が「ソナタ形式からなる楽章を含む楽曲」であるが、そうではないものもある。古典派以後の交響曲、古典派以後の協奏曲、弦楽四重奏曲や木管五重奏曲、ピアノ五重奏曲も「ソナタ」である。「ソナタ」の第 1 楽章はソナタ形式、または変奏曲、終楽章はソナタ形式かロンド、またその混合形のロンドソナタ形式の場合もある。

中学校の鑑賞教材の曲のヴィヴァルディの《四季》は「合奏協奏曲」で、バロック期によく作られたが、協奏曲と名付けられていても古典派以後の協奏曲とは違い主要主題を奏する合奏が独奏部分をはさんで何度も戻ってくる形で「リトルネロ形式」とも呼ばれている。現場での指導に備えて構成をよく理解しておくようにさせる。

下記は各形式の学習曲である。

ソナタ形式学習曲…	クレメンティ 《ソナチネ Op.36 No.1》第1楽章
	モーツァルト 《ソナチネ 第1番 ハ長調》第1楽章
	ベートーヴェン《ピアノソナタ Op.2》第1楽章
	《ピアノソナタ Op.13 悲愴》第1楽章
	《ピアノソナタ Op.27 No.2 月光》全楽章
	《交響曲 第5番 運命》
	モーツァルト 《フルート協奏曲 第2番 K.314》
ロンドソナタ形式学習曲…	ベートーヴェン《ピアノソナタ Op.13 悲愴》終楽章
リトルネロ形式学習曲…	ヴィヴァルディ《合奏協奏曲 四季》より〈春〉

3. 変奏曲形式

バロック・古典派の器楽曲で、ソナタ形式と共に中心となった変奏曲形式を旋律・リズム・和声・調の各面から検証し、その変化を理解させる。大曲であることが多い「シャコンヌ」やそれよりオスティナートの連続の少ない「パッサカリア」も一定のリズムを持つバス上の変奏曲であることにもふれ鑑賞させる。

下記は学習曲である。

変奏曲形式学習曲…	ベートーヴェン《「ネル・コル・ピウ」の主題に基づく6つの変奏曲》
	ヘンデル《組曲第2巻第2番》より《シャコンヌと変奏曲》
	J.S. バッハ《パッサカリア》

4. 組曲・舞曲

バロックから近代まで作られた組曲は4～12曲程度までの小曲を組み合わせたものであるが、中心となる曲は舞曲のアルマンド、クーラント、サラバンド、ジグで、それらに舞曲ではないインテルメッツォ、プレリュード、アリア、フーガ、カプリッチョ、舞曲であるメヌエット、ガヴォット、パスピエ、ポロネーズ、ルールなどがつけ加えられている。それぞれ二部形式か三部形式であることが多い。上記の曲に加え、他の舞曲ガイヤルド、ワルツ、ポルカ、マズルカ等も発祥の時代、国や地方も説明し理解させる。またロマン派の組曲とそれ以前の組曲との違いを説明し文学やバレエとの関わりを理解させる。

下記は学習曲である。

組曲・舞曲学習曲…	J.S. バッハ《フランス組曲 第1番》
	ヘンデル《組曲 第2巻第4番》
比較参考鑑賞曲…	モーツァルト《ディヴェルティメント K.563》

5. フーガ形式

フーガはバロック期の作曲家の頂点の J.S. バッハが極めた形式である。「フーガ」は、ある旋律を対位的に発展させた曲で、学習する《インヴェンション》、《シンフォニア》、《平均律クラヴィア曲集》全 2 巻では、ほとんどの曲が二部形式か三部形式でできている。それは、ほとんど主題以外の動機を使わず、その模倣、主として主題の旋律の上行下行を逆向きにした反行・反転、反復、拡大、縮小、移調、転調で構成されている。上記の鍵盤楽器曲で細かく学習するが《フーガの技法》の弦楽器による演奏を鑑賞して弦楽器でのフーガを理解する。またフーガより複雑さがなく規則的、連続的に声部を替えて主題をくり広げていく「カノン形式」を楽譜と音源で学習し、小学校で歌ったであろう単純形の「ラウンド」という輪唱も曲名をあげて内容を説明する。

下記は各形式の学習曲である。

フーガ形式学習曲… J.S. バッハ《インヴェンション》1 番、8 番

《平均律クラヴィア曲集》第 1 巻 16 番

カノン形式学習曲… パッヘルベル《カノン》

6. 様々な楽曲

これまで学習した形式以外の構成の曲（バラード、ファンタジー、スケルツォ、バルカローレ、ノクターン、セレナーデ）を、構成・旋律線・リズムの面から学習する。また、パレストリーナ《教皇マルチェルスのみさ曲》、モーツァルト《レクイエム》は原詞、訳詞共見ながら学習する。

おわりに

楽式論は、楽曲分析や西洋音楽史と切り離して授業展開していくことは出来ないため、説明の中でおのずとそれらに触れることができ、理解し記憶していけることを理想として上記の内容で進めてきた。中学校・高等学校での教育実習や将来の授業現場で取り上げる曲とも絡ませて学習するので教材研究にもなり、この授業を基に更に入念な準備をしてそれに臨んで欲しいものである。